

漢法苞徳塾資料	No. 177
区分	診察論・脈診
タイトル	脈診法の基礎
著者	八木素萌
作成日	

◎祖脈について

1：素問の説

緩・急・大・小・滑・濇、マタハ 小・大・滑・濇・浮・沈

2：難経の説

浮・沈・長・短・滑・濇（清・李氏の解釈）、

さらに遅・数・大・小・緊・濡の脈にも、基本的な意味を与えている。（註：八木）

3：傷寒論の説

弦・緊・浮・沈・滑・濇

4：滑伯仁の説

浮・沈・遅・数・滑・濇

夫レ所謂六ヲ出ザルモノハ亦其レ表裏・陰陽・虚実・冷熱・風・寒・湿・燥・蔵・府・血・氣ノ病ヲ統ブルニ足ルナリ。

浮ハ陽ト為シ表ト為ス、診ニハ風ト為シ虚ト為ス

沈ハ陰ト為シ裏ト為ス、診ニハ湿ト為シ実ト為ス

遅ハ蔵ニ在リト為シ寒ト為シ冷ト為ス

数ハ府ニ在リト為シ熱ト為シ燥ト為ス

滑ハ血ノ有余ト為ス

濇ハ氣ノ独リ滯オルト為ス

◎提綱論

1：浮ハ表ニ在リト為ス則ワチ散大ニシテ芤ハ類スベキナリ

2：沈ハ裏ニ在リト為ス則ワチ細小ニシテ伏ハ類スベキナリ

3：遅ハ寒ト為ス則ワチ徐・緩・澀・結ノ属類スベキナリ

4：数ハ熱ト為ス則ワチ洪・滑・疾・促ノ属類スベキナリ

5：虚ハ不足ト為ス則ワチ短・濡・微・弱ノ属類スベキナリ

6：実ハ有余ト為ス則ワチ弦・緊・動・革ノ属類スベキナリ

★留意事項

- 1：浮……陰虚の人は浮となるので（無力ニ而テ浮）発汗・升散の治法は向かぬ。
- 2：沈……傷寒の初感の時は、陰寒が皮毛を束する為に陽気が外達できないので必ず沈緊となる、この時には下法・和法の治法は逆治となる。
- 3：遅……傷寒の治りはじめで、なお余熱が冷めきっていないときは、脈は多くは遅・滑となる、この時には温中の治法は誤治となる。
- 4：数……虚損の人は、「陰陽俱虧」して「気血敗乱」するので数となり、虚が益すと数も益す。寒涼を加える治法は逆治。
- 5：伏（微細など）…痛が極まって経気が擁閉すると脈は多くの場合伏匿するので、虚と見誤って補すことになりやすいが誤りである。
- 6：洪（又は弦）……「真陰大虧」のものは脈は関格となるので、返って弦などの真臓脈を現わす、絶対に瀉すべきではない。
- 7：肥盛の人……脈は浮洪の気味となる傾向が普通であるが、筋肉が緊堅厚な体の者の脈は重按しなければ不分明となる。
- 8：瘦小の人……脈は沈数でやや細い傾向が普通であるが、筋肉腠理が浅薄で濡の場合には脈は返って浮となる。
- 9：性急の人……一息五至が普通、然し気分や身体がのどかになる様な事や時があれば、脈も緩徐となる反映を示す。
- 10：性緩の人……一息四至が普通、然し身心に緊張を要することがあれば、脈に反映する。
- 11：身長の人…寸口部も長くなるので、三指を粗くして脈を診る必要がある。
- 12：身短の人…寸口部も短くなるので、三指を密にして診脈する必要がある。
- 13：北方の人…脈は実強の傾向があるが、美食を続けていたり母親が南方の人である時は、異なってくる。むしろ南方の人の脈の如くなる。
- 14：南方の人…脈は軟弱の傾向がある。労苦に長く耐えれば実強の気味を帯びることもあろう（先天が強くて）。
- 15：少壯人……脈は多くは大の傾向である。虚弱・怠惰・贅沢であれば虚細や濡軟の如くなる。
- 16：老年……脈は多くは虚の傾向、十分に食欲があって健康度が良い場合は沈実の傾向を帯びることになる。
- 17：酔後……脈は数となり浮大となる。
- 18：飲後……脈は洪の傾向を帯びる。
- 19：室女・尼・姑…多くは軟・弱・濡となる、然し心が暢びやかになる様な楽しい事、ゆっ

たりと出来ることが続けば衝和の脈となる。

20：嬰兒……常には一息七至（五才以上は六至、三才以下は八至－三関の紋・魚腹の紋も看ることが必要、小児はもともと純陽である故に重按して候がいにくものが「平」である）。

★脈状の把え方

●比類法（A）と、対比法（B）を用いて学ぶのが良い。

（A）……似通った脈を知って、それらの間の区別をつけるように訓練する。

（B）……対照的な脈を知って、その両極の脈を把握し意味する所を学ぶ。

◆A……遅と緩、沈と伏、数と緊と滑、浮と虚と朧、濡と弱、微と細、弦と長、短と動、洪と実、牢と革、促と結と濇と代、

◆B……浮と沈、数と遅、虚と実、長と短、滑と濇、洪と微、緊と緩、結と促、
※対比不能の脈－代、牢、弦、革、朧、細、弱の八種。

◇別説……浮と沈、遅と数、虚と実、長と短、滑と濇、洪と微、緊と緩、動と伏、結と促、等であり、対比不能の脈は代・革・牢・弦・朧・濡・細・微の八種。

◆A

浮＝挙げて有余、沈めて不足	濡＝浮で細数
虚＝浮にも沈にも大きく無力 ＝浮と沈に見られ、中で触れない中空の感じ	弱＝沈んで細数 遅＝形小さく衰え一息三至
数＝往来急迫し一息六至	緩＝形大きくゆったり一息四至
緊＝縄をよった様で左右に緊拍す	沈＝重按にやっと感じられる
滑＝往来滑で珠を転がす如し	伏＝重按するも不分明筋下に筋を押し分けて やっと感じられる
微＝有るか無きかの如く蜘蛛の糸の様	弦＝弦を按ずる如し搏って来感じがとぼしい
細＝糸の如く細く、一本に応じ微より勝る	長＝長竿を撫すが如く本位より長く弦に似る
短＝脈短く本位に及ばず遅滞がちの感あり陰沈也	牢＝沈大で弦かたく位置を守る 革＝浮弦で大虚、内は虚し外は急
動＝浮陽滑数で本位に及ばず豆を転がす如く揺れ動く	実＝充実して力強く感じ挙げても重按しても 変わらず
洪＝沸き上がって盛大に指に満ち重按すればやや減ず	
促＝数急疾で時に一止す（陽）	
結＝凝結し徐で時に一止す（陰）	
濇＝遅短で渋滞し時々調子が乱れ動きだしては 休む	濇…脈の手触りがガラガラするとか、皮のついた竹の表面を刃を立てて撫擦する時のガラガラと渋る感じ等と言ひ往来が滑らかでない
代＝動いては止まるが、止数は規則的で前の三者とは異なる	

◆A

	六脈派の説	陳修園の説	「医原」の説（石芾南）			
浮	洪芤革濡弦	芤革散	浮	表	沈	裏
沈	牢伏	牢伏	緩	熱	急	寒
遲	緩瀼結代	結代	大	氣多血少	小	血氣俱少
數	促緊動疾	促緊動	滑	陽氣盛	瀼	陰血少
虛	弱細細短微	弱細微濡短瀼	八脈で表裏寒熱虛実順逆を弁別する			
実	長滑	長滑洪弦				

★婦人の脈

A：月経

- イ) 左の関・尺の脈が急に右よりも洪大になるが、口苦くなく身熱なく腹満腹脹なければ、正に月経の始まらんとする象
- ロ) 寸関の部が和しているのに尺の部に脈を触れぬのは多くは不順の象である

B：閉経

- イ) 尺脈の微・瀼なるは血少血虚の閉証
- ロ) 尺脈の滑なるは実の閉証

C：妊娠

- イ) 懐胎は妊脈と衝脈の動きが盛んになることでもある、胞（子宮）に血が聚るので数滑となる、然し他は正常でも弦芤瀼洪などを現わさない、乳曇が黒く変ずるのも象
 - 婦人手少陰ノ脈動ズルコト甚シキ者ハ妊子ナリ（『素問』平人氣象論第18）
 - 身ニ病有リテ脈ニ邪無キナリ（『素問』腹中論第40）
 - 陰搏チ陽別ル之レヲ有子ト謂フ（『素問』陰陽別論第7）
- ロ) 飲食の嗜好が平素と異なる
- ハ) 午睡して起きたばかりの時は必ず滑疾有力となるので、軽率に間違えないように注意を要する
- ニ) 「陰搏陽別」と言うのは、両の尺は滑数であるのに寸脈は陽脈とは異なることを言う、「手少陰脈動甚」を王冰は神門の脈と解し、広東中医学院・中医診断学は左寸の脈と言う、妊娠の為に月経が初めて止まったときは胞に血が聚まろうとするので、そのことが脈に反映して滑動となることが大切。
- ホ) 鑑別を要するものに積聚がある、積聚は多くは弦緊沈結又は沈伏であるが妊娠脈は必ず滑である、また労損があると数となる時もあるが多く瀼を兼ねる、妊娠の脈は必ず滑である。

→何廉臣の説に『凡て婦人の血旺んなる者は孕による、則ちこの穴（中衝）に脈動ず、また経験多し。他に尺脈の濇微たる如きは経期の定まれるに愆（クルウ）えり、尺大にして旺んなる者は胎有って廉（現代中国語でも文語用法として‘調査する’の意）なるべく、滑疾にして代はまた有胎となす、正に生まんとする脈は脈必ず経（つね）を離る、産後の血崩は尺は関に上がらず其の血既に尽き大命まさに傾く』とある。

D：胎の死活

妊婦は陽気が必ず丹田に動ずるので、脈は沈按すると洪が見られる。これは胎形の温養の姿を反映しているのである。沈で濇脈が見られれば精血の不足であり胎はその影響を受ける。沈に候ってみて陽気が衰絶していれば、すでに死胎であるか、または痞塊である。

E：正に生まんとする脈

『諸病源候論』に「孕婦その脈を診して転急して切繩転珠の如きは即ち産なり」とある。

※註 →切繩転珠とは緊滑の脈状のこと

→『医存』に「婦人ノ両中指ノ頂節ノ両傍ハ正ニ産ノ時ニアラザレバ即ハチ脈セザルナリ臨盆（お産の用意）スベカラズ、若シ此処ノ脈跳リ腹腰ニナツテ痛ミ一陣ハ一阵ヨリ緊ニシテニ目ニ金花乱出スレバ正ニ産ノ時ナリ」とある。

→『脈経』に「婦人ノ懐妊ハ離経ス其ノ脈ハ浮ス設ケテ腹痛シ腰脊ニ引クハ今生マント欲スト為ス但離経スルモノハ不病ナリ」とある。

→『四診抉微』に「女腹ハ箕ノ如ク男腹ハ釜ノ如シ、産ヲ欲スルノ脈ハ散ニシテ経ヲ離ル、新産ノ脈ハ沈細緩ヲ吉ト為ス、実大弦牢其ノ凶ナルコト明カスベシ」とある。

→『脈経』に「婦人生マント欲スレバ其ノ脈ハ離経ス、夜半ニ覚ユレバ日中ニ則ワチ生ルナリ」とある。